

## 「沈黙の中に現る幻」

ヨハネの黙示録

第1章 4節～8節

説教 本庄 侑子 牧師

神がおられるのなら、なぜ沈黙しておられるのか。悲痛な叫びの中に現れた、ある幻がありました。教会は日曜の朝ごとに、その幻のもとに集められ、その幻に生かされてきました。

ヨハネの黙示録が書かれたのは一世紀の終わり頃。教会にとっては大きな苦難の時代でした。皇帝以外を拜む者たちは刑罰を受け、時に殺されました。そのような中、キリスト者は礼拝を自分の命よりも大事にし、集まっていました。

現代日本社会では、法律上は信教の自由は保障されています。しかし、礼拝を守る困難さはヨハネの時代に匹敵するかもしれません。日曜の朝に進学や就職に必要な試験がある。重要な仕事も入ってくる。礼拝を守っていたらあつという間に社会からはじかれてしまいます。

そんな中、神はヨハネに幻をお見せになりました。それは主の日、日曜日のことでした。ヨハネは信仰のゆえに島流しの刑に処せられていました。共に集まる人はおらず、社会からはじかれ、孤独でした。しかし、一人でも祈っていました。この日が主の日であることを思って祈っていました。

ヨハネが見たのは開かれた天の門、天におられるキリストの姿、天で捧げられている礼拝、終わりの日の情景でした。私たちは聖書の知識を得たり、一時的な心の癒しを得たりするために集まり、祈るではありません。礼拝に、祈る人に、天の門が開かれている。天とつながっているのです。

ヨハネは神を語ります。「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(4節、8節)。神は私たちが救うために「やがて来られる方」、刻々と近づいて来られる方です。その方は「かつておられ」た方です。どうしてあんなことになったのかと心凍てついた夜も、神は共におられた。その方は「今おられ」る方です。「今おられ」が真っ先に書かれています。かつておられ、やがて来られる神が、今あなたと共におられるのです。

続いて、ヨハネはイエス・キリストを語ります。「証人、誠実な方」(5節)。「証人」は「殉教者」という意味も持ちます。主イエスは、人の罪を背負って身代わりに死ぬという究極の苦難を味わいながら、その時でさえも神が共におられたことを、ご自身の死と復活をもって証してくださいました。主イエスは、苦難に叫ぶ私た

ちに、「神は今、あなたと共におられる！」と語ることができるお方です。

そのお方は「死者の中から最初に復活した方」(5節)です。主イエスは死んで墓に葬られました。しかし、墓から出て来られました。先週、一人の姉妹が召されました。姉妹の肉体は火葬されました。神の沈黙が耐え難く心に食い込んできました。しかし先週木曜日、姉妹の体が収められた棺と共に正午礼拝を守りました。お読みすることになっていたのは、主イエスの墓が空になった箇所でした。また、讚美歌151を歌うことになっていました。「よろずの民 よろこべや、主イエス陰府にかちませば。死のちから はや失せはて、ひとのいのちかぎりなし。」

人の目には、愛する者が骨と灰に化す時、死の力が勝ち誇るように見えます。しかし礼拝で聖書の言葉を聞き、兄弟姉妹と賛美するとき、沈黙の中に働く神の御手が見えてくる。死が打ち破られた姿が見えてくる。主イエスが墓を空にし、体をもってよみがえられたように、終わりの日、姉妹も私たちも霊の体をもってよみがえられます。教会は日曜の朝ごとに、その幻をこそはっきりと見つめさせられるのです。

主イエスは「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方」(5節)です。私たちは愛されています。苦しみはある。しかしそのような今、神の独り子が、私たちの身代わりに血を流して死んで下さったほどに愛されているのです。罪赦され、なお地上に残されるのは、「王」、「祭司」(6節)として神に仕えるためです。私たちは、神以外の何にも支配されない王、人のために罪の赦しを祈り求める祭司とされたのです。

ヨハネは孤独でした。いつ殺されてもおかしくありませんでした。しかし、ヨハネが見ていたのは、自分の孤独や迫る死ではなかった。一番近くに見ていたのは、キリストが再び近づいて来られる姿、そのキリストを突き刺した自分たちの罪と醜さ、その罪を負って死んでくださったキリストを思うゆえの嘆きと悲しみでした(7節)。それが、沈黙の中に現れた幻でした。祭司として死の眠りについた殉教者ステファノが見たのもこの幻でした。(使徒言行録7章54節～60節)私たちを教会らしい歩み、キリスト者らしい生と死に導くのは、この幻です。

(記 本庄侑子)